



湯柳文庫

拾六

^ 13
3330
15



明 へ 13
3330
15



武通陽柳文庫卷之拾六



目録

- 一 お伴道員大屋下同右の事
ちりどろや どろまよ
- 一 お伴祐常の三右衛門を笑ふ事
サヤザシ ミツネウラノ
- 一 三年お伴美公おより対面たいめんの事
たがし
- 一 疑ぎふををくく人し事
きし

大正十八年
本大學出版部贈

東通陽抄文庫 卷之拾六

ちりどくや じよまよ
お伴通員大彦の因左の事

やよせう じよまよのふ
長お伴依左の三右衛門を写す事

まき ちり ちりき へいすけ
友もお伴とて任をを長お伴の事

つた ちりき
けしきりや かくとくをり

こち ちりき
ハ 好替りの又六多替をり

おきき
揮来りして年、事むらり

をたあしそをせなればお仲の
多よらり能くそらまがよ
うさうたまの細き糸の糸を
うらも物あさぐらや泉下
よてそなよあがさし今
うさうのそありのとそまき生
をくよまきととととととと
ちよあ心をあしあくま流

かゆは是ううととととととと
そまらうしが物物あてらと
て徳も徳もさうはさるればあ
うさうととととととととと
拂ひたきうととととととと
かかかかかかかかかかか
あたのそP仙居き母あきあ
しとおのそととととととと

あがら 切き
影り 至たりりりりの心骨お
まの 心又心たのこもよと
とつて 心ればお件いりて
がら 心とありのは心と
心世心いりて 心世心心たのこも
ちり 心たの心とて 心たの心と
心とを 心とては心とて
心とて 心とては心とて

心世心心たのこもよと
心とを 心とては心とて
心とて 心とては心とて
心とて 心とては心とて
心とて 心とては心とて
心とて 心とては心とて
心とて 心とては心とて
心とて 心とては心とて

あも三年の夜を花よあけてを
うらむもうとたふたが在家を
まうて年時日定るに寝足し
て顔の首を髪をかくゆくと
そぬのちなけよもやれども
彼と一白のちを——が今日
眼色の常日うれば山を云ふ
まうとまうとまうとまうと

のちと死り——とををきりて
まあうらう舞布の湖をうら
て香を焚つて自を合せてまを
らくあををあ——唯この言葉
をまうら死るるところに
お伴二くのる伴のまを引てま
の巻をかくまうとと香ををり
まうとまうとまうとまうと



あしつとびましく養ふよし
むしひの嫁婦の口上をたく
らよよんるしうの子供を
あかしく教をけりてあかしく
そ文の業能を極りしと書
公子あらのをあらぶ今やま
歌のともあを部くあかしく日
を運らるすあかしくし

あしつとびましく養ふよし
むしひの嫁婦の口上をたく
らよよんるしうの子供を
あかしく教をけりてあかしく
そ文の業能を極りしと書
公子あらのをあらぶ今やま
歌のともあを部くあかしく日
を運らるすあかしくし

トギ
〜 自分としてまたの由と
つれをおし〜 せむしを痛く
多〜 金の袋は家の主人が
質斗目の切のめり〜 一圓女
の多身〜 さいふを〜 聖く〜 ぐ〜 と書

〜 を見れば
鳥又今月今日分知ス山
今人〜 菅原忠俊妻多幸城

つゝむさのしすめちうぢよ
常久人娘伴女

と化〜 三月の〜 三平
ち〜 後悔〜 取〜 白
女〜 娘〜 一〜 一〜 一〜
人の〜 言〜 一〜 一〜 一〜
言〜 一〜 一〜 一〜 一〜
そ〜 一〜 一〜 一〜 一〜

と恨しで病るる死ししとさす
とりまのあつと移うつ先さきううるる水みづ井い家のやの
こまこままくく湯ゆ竹たけくく情じやう乞ぎくく一いくく
報ほう善ぜんくくちち外がいををううけけ一いくくがが仁にん基ぎのの
非ひ君きみををくくらられれてて正せい終しゆうのの指さし指さしとと
初はつ尾びのの指さし指さしとと一いくく以も持ぢおおをを願ねが
敷敷一いくくままくくははどどううをを知しわわがが来きりり
てて是このの春はるのの始はじめ来きりりてて湯ゆ茶ちやのの

かかたたくく
任にん定ぢやうををととりりううくくとと行ゆくく今いまののまま
四し所じよのの任にん定ぢやうををととりりううくくとと行ゆくく今いまののまま
所じよのの任にん定ぢやうををととりりううくくとと行ゆくく今いまののまま
半はん一いくくままくくははどどううをを知しわわがが来きりり
ハハ三さん年ねんもも深ふかくくああららむむどどととよよねねどどううにに
ままりりととははかかのの身みををししららみみてて
ああららむむののああららむむ一いくくままくくははどどううにに

